

日本文化の基底、漢文の世界的研究拠点を目指す

石川忠久・二松學舎大学学長



いしかわ・ただひさ 1932年生まれ。55年東京大学文学部卒。同大学院修了。72年桜美林大学教授。90年二松學舎大学教授。95年大学院文学研究科長。98年に理事長を経て、2001年に学長に就任。(勸斯文会理事長。全国漢文教育学会会長。文学博士。

二つの快挙に沸くキャンパス

二〇〇四年は「松學舎大学」として喜ばしい出来事が二つ続きました。一つは、九段の新キャンパスが完成したこと。もう一つは、文部科学省が世界レベルの研究拠点を作る目的で進めている、「二十一世紀COEプログラム」に、本学の「日本漢文学研究の世界的拠点構築」が採択されたことです。

本学は、明治一〇年に漢学塾として出発しています。明治初期の性急な西歐化に批判的であった創立者・三島中洲が、日本の伝統文化の継承と東洋精神の発揚を目指して、本学を創設したのです。以来本学は、その建学の精神を受け継ぎ、「国漢」(国語・漢文)の研究と教育に力を入れてきました。

そして、本学の特色をより鮮明にするため、平成一



都心型校舎で新しい知の拠点を狙う。

五年度に大学院の中国学専攻に中国学、日本漢学、総合文化学部の三講座を設けるなど、大学改革に取り組んできました。中国学講座は中国の文学、思想、語学を対象とし、日本漢学講座は漢文を、総合文化学講座は漢字文化圏である中国と日本と韓国の文化を総合的に研究する講座です。つまり、本学の特徴でもある漢文研究と漢文教育を一つの柱として、広く東アジア漢字文化圏の中でこれを捉えなおすという「知の組み替え」を試みたのです。

さらに、国際漢字文献資料セン

ターを設置して、漢字漢文文献の調査・整理を行い、またその専門家の養成に着手しました。これは現在、東アジア学術総合研究所と名前を変え、より発展した形で拡充を図っています。こうした基盤の上に今回のCOEプログラムの採択があるわけで、伝統の精神を活かしつつ、新たな時代に即応した大学を目指して改革に取り組んできた私どもの努力が高く評価されたものと大変うれしく思っています。

「急がれる漢字文献の調査・収集」漢字漢文はもともと中国のもので、日本人はむずかしい中国の古典の文章をたちどころに翻訳する方法、訓読法を考案しました。そして、この漢文訓読法を使って、日本人は文学、思想、芸術、宗教、あらゆる分野にわたる文献を読解し、また自分たちも詩文を綴ってきました。つまり、歴史的にみれば、長きにわたって、漢字漢文は日本の学術分野の

根幹をなしてきたのです。ところが、明治以降、ことに戦後は、漢文やその訓読法は、不用なものとして軽んじられ、漢字漢文教育は疎んぜられ、なおざりになってしまいました。このため、日本文化の根幹に関わる膨大な漢字文献の調査・収集や保存がおろそかにされ、これを読解する力が衰えてきたのは、否めない事実です。

このため、今回採択されたCOEプログラムでは、具体的に次の四つのことを計画しています。第一に国内外の漢字漢文文献の所在調査を行い、世界規模の書誌データを作成すること。第二に国際会議やシンポジウム等を開催して、海外も含めた研究者同士の情報交換と交流を図ること。第三に、文献を読解し、これを研究する専門家を養成すること。そして第四に、漢文教育振興のための教科書を編集すること、などを計画しています。

「日本漢文学」の学問は日本の伝統に根ざした貴重な文化遺産です。今回のCOEプログラムの採択は、二松學舎大学のみならず、日本文化全体に関わる快挙であり、漢字教育、漢字文化の振興に携わる多くの人々に活力を与えるものと私は信じています。

